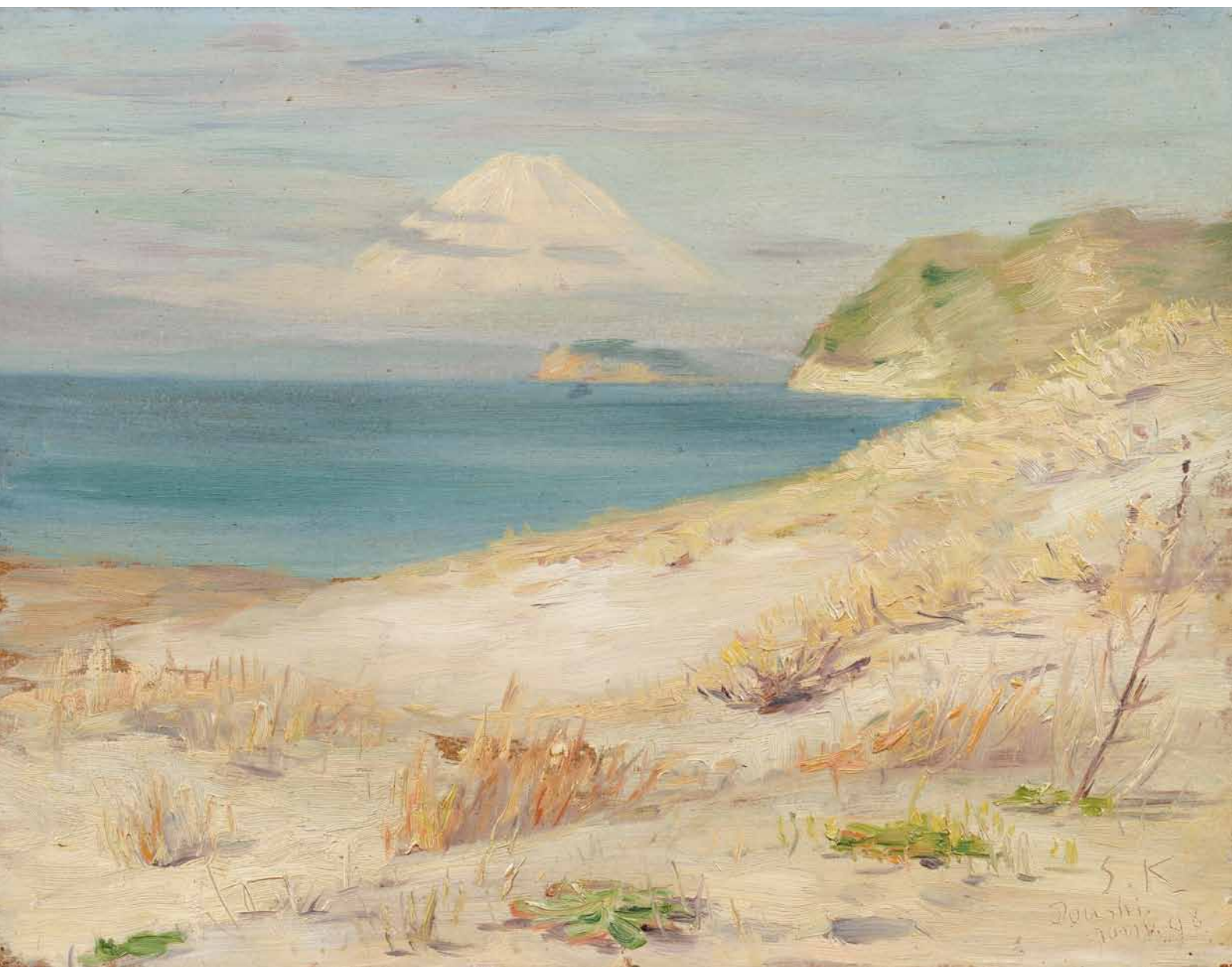


アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



本作品を制作した一八九八年、黒田清輝は三十二歳。前年にはのちに代表作となる《湖畔》《智・感・情》を描き上げ、この年の四月には満を持して東京美術学校西洋画科教授に就任。まさに脂ののった時期であった。

本作は逗子あるいは鎌倉の海辺から海を隔てて富士山を描いた六枚組の連作。季節と時間によって移り変わる情景が澄明な色調で描き出され、黒田の主な活動の舞台であった白馬会第三回展覧会に出品された。

富士山は、洋行帰りで日本の美術教育を担う存在となりつつあった黒田が日本を象徴する画題として選んだものと考えられる。油絵具という西洋の素材を用いて日本の風景をいかに表現するべきか。多くの画家が帰国後直面するこの課題に、黒田は真正面から取り組んでいる。

(上席学芸員 村上 敬)

No.
111
2013年度 | 秋 |

「見る」と「語る」

美術館と大学との連携を通して

平野 雅彦

静岡大学 人文社会科学部客員教授

静岡県立美術館のロダン館を舞台

に実施した「静岡大学の学生によるギャラリートーク」に参加したある学生が、その試みを振り返って、学びの途中に湧き上がった心の内をこんなふうに述べました。

「作品を『紹介』できても『語れ』てはいなかったのです」。

この学生は、いったい何を述べているのでしょうか。

今回の静岡県立美術館と静岡大学人文社会科学部の「連携」によって行われた授業のテーマは、「美術を見る 美術を語る」。この「見る」と「語る」とはそもそも何か。そうして、この両者の間にはいったい何が横たわっているのか(ここでは「見る」と「観る」を同義として扱う)。これは極めて難解なテーマです。

ところで私たちは展覧会に出かけ

ても、実はそこにある作品をほとんど観ていないということはないでしょうか。作品の側にあるキャプションだけを読み、ちらつと作品に流し目を送り、観たつもりになって、また隣の(作品ではなく)キャプションへと無自覚に「体」が移動していく。そんな滑稽なことが起きている場合があるのではないのでしょうか。

その後、先の学生とディスカッションを重ねて分かったことは、「知識だけを詰め込んで作品を解ったつもりになっていても、自分の言葉では語れていなかった」、つまり何も見ていなかったという事実です。一つの作品とじっくり向き合う。作品と自分が共鳴するまで見続ける。その行為そのものが、「見る」

ということではないのでしょうか。た

だし、見るということを通過して、今度は語るといふ段になると、そこでは「見る」と「語る」の間に明らかに、言葉になりえない何かを感じ続けることとなります。このギャップを無限に埋め続けていく行為こそが、実は「わかる」ということなのかもしれません。

今回ギャラリートークに参加した学生五名は、いずれも普段は美術を専門に学んでいるわけではありませんが、言語文化学、社会学、経済学、法学といった学問を学んでいます。一見すると美術とは縁遠い学問のように思えます。では彼らに美術を見る眼は必要なのか。もちろんそんなことはありません。作品の中には未だ言語化されていない多くの知が潜



学生によるギャラリートークの様子

でいます。「見る」と「語る」の関係には無限の可能性があるので。

今回のギャラリートークを通じて、美術に親しみながら学問を深めることの重要性を再認識しましたが、もう一つとても大切な発見がありました。それは、自分の住んでいる地域には、こんなすばらしい財産があるということに気づき、誇りを持つことです(シビック・プライド)。それは言い換えるなら、美術をもつと「生活にする」ということです。

【データ】

静岡大学の学生によるギャラリートーク
実施日：二〇一三年七月十三日(土)・十四日(日)

授業名：比較言語文化各論Ⅰ 担当教員 今野喜和

人、平野雅彦

参加学生：静岡大学人文社会科学部 二年生六名
静岡県立美術館担当：秦井良、三谷理華、川谷登承子

ロダン館の魅力再発見

お客様にロダン館の魅力を再発見してもらうために、今年度は、美術館の職員がアイデアを出し合って企画した、六つのイベントを実施します。

「夏休みクイズラリー 親子でロダン館を探検」（八月十三日～二十五日）は、夏休み期間に実施し、大勢の方にご参加いただきました。参加者は解答用紙を手にロダン館を回って、作品付近に設置された看板に書かれた十問のクイズに答えます。ロダン館に初めて入られた方、これまでも何度か足を運んだことがある



「夏休みクイズラリー 親子でロダン館を探検」の様子

という方も、クイズに答えるというちょっとした仕掛けを通して、重厚なロダン彫刻を身近に、なおかつ、いつもとは違う角度からご覧いただくのではないのでしょうか。全問正解者には抽選で、当館と有度山フレンドシップ協定を締結している日本



動物園賞景品



エスタ賞

また、このクイズラリーに合わせて、「もっと知ろうロダン館スペシャル」を同時開催しました。通常、収蔵品展とロダン館を三十分のツアー形式でご案内している当館ボランティアが、八月十三日、二十五日、開館から夕方までロダン作品の前に



立ち、鑑賞の際の、お客様の対話相手を務めました。クイズラリーに参加している子供たち、お一人でお入り立ち寄られた方、ご家族連れ、さまざまな方々との、ロダン作品にまつわる会話が弾みました。

平ホテルさん、日本平動物園さんよりご提供いただいた、豪華プレゼントが当たるといううれしいおまけ付きで、景品の魅力が手伝って七百七十名ものご応募をいただきました。

そしてこれから先、秋から冬にかけて、静岡音楽館AOIさんとの連携による「ロダン賞受賞記念午後のひとときコンサート」のほか、学芸員の指導の下で、参加者にブロンズ彫刻を清拭してもらう「ブロンズ彫刻を拭いてみよう」、カメラマンを講師に招いて、彫刻の撮り方についてのレクチャーと講評付撮影会を行う「デジカメでロダン彫刻を撮ろう」、カレーの市民をモチーフにした鑑賞キットの設置が予定されています。（イベント名はすべて仮称）

今年のロダン館は、これまでとは違った視点から、ロダン作品に出会うことができる仕掛けが盛りだくさんです。各イベントについては、詳細が決まり次第随時、チラシ、HP等で告知いたします。お楽しみに！

（上席学芸員 川谷承子）

静岡県立美術館所蔵

二見彰一展

2013年11月22日(金)～
2014年1月19日(日)

秋も少しずつ深まってくる今日この頃、皆様、如何お過ごしでしょうか。色々物思う季節ですが、今年皆様は、二見彰一の世界をお届けします。

二見彰一（一九三二～）は、大阪に生まれ、戦後日本の銅版画界を支えてきた作家の一人です。幼いときから絵筆に親しんでいた彼は、長谷川潔の作品を見て、その深い諧調、ピロードのような絵肌に衝撃を受け、独学で銅版画を学びます。長谷



《旅の夜に》1976（昭和51）年 紙、アクリル

の世界でした。

二見の作品は日本のみならず、ヨーロッパ、特に北ドイツで反響を呼び、各地で版画や水彩画の展覧会を五十回以上開催しています。彼の地では、その豊かな画面空間が、意識して「ものを減らしているように見える」と言われたそうです。元々ヨーロッパの技法であった銅版画技法を駆使して、全く見たこともないイメージを展開する二見の作品は、さぞ驚きを以って迎えられたことでしょう。

当館は二〇〇九（平成二十一）年



《一葉》1996（平成8）年 紙、水彩

川の技法はメゾチントですが、二見は当時必要な道具をどうしても入手出来ませんでした。そこで、類似した効果を生みだせる技法として、アクアチントに取り組み、可能性を様々な模索しました。その結果見えてきたのは、夢見るような詩情と、凜とした静かな佇まいが同居する、独特



本の窓

シャリン・エヴァンス著
村上リコ訳

『メイドと執事の文化誌』

—英国国家事用人たちの日常—

原書房 二〇一二年刊行

エリザベス女王即位六十周年、その孫ジョージ王子の誕生。今年には、話題豊富な英国に興味を持ち、かつ訪れた人々も多かったのではないのでしょうか。本書は、王室を頂点とする貴族あるいは富裕層を支える側だった使用者たちの毎日の生活を、膨大な資料から明らかにしたものです。実際、使用者たちにこんなに多くの種類と序列があったとは、階級社会からほど遠い二十世紀の異国に住む我々には、目から鱗の驚きです。アフタヌーン・ティーに使われたサロンや茶器など、豊富な図版を見ると、こんな展覧会にもチャレンジしてみたいな、と思わず魅せられてしまう一冊です。

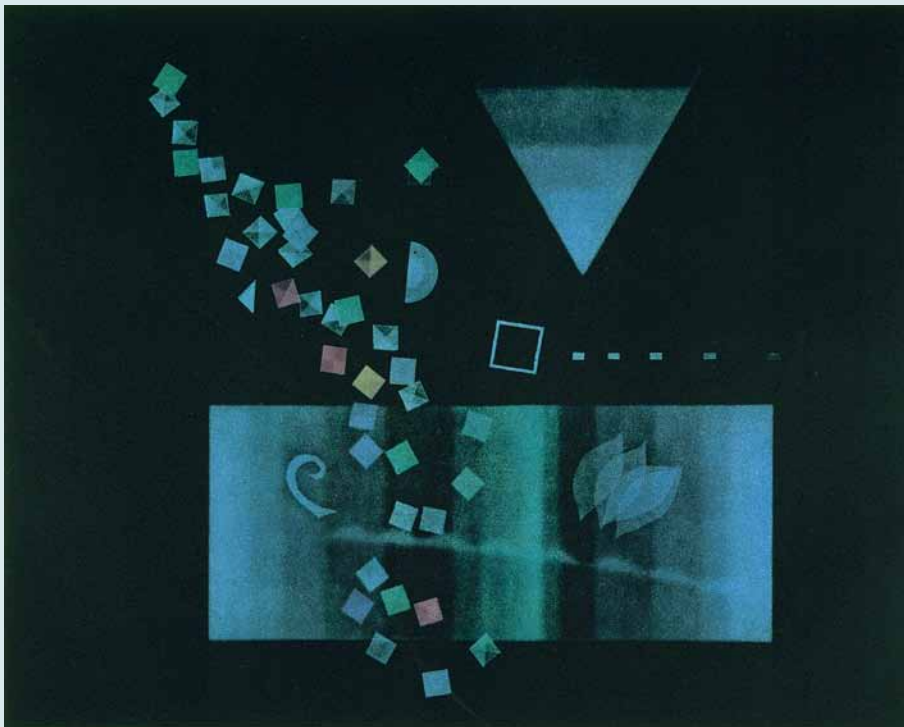
（上席学芸員 南美幸）

をまとめてご覧頂くのは、世界でも
 静岡では初め
 ての機会です。また水彩や素描、制
 作に用いた銅版も含め、二見の歩み

世界で、落ち着きとくつろぎのひと時
 を過ごして下さい。

(上席学芸員 新田建史)

度に作家自身からの寄贈を受け、一
 三七点の二見作品を収蔵しました。
 本展では、作家所蔵の作品や資料を
 さらに加えた
 約三〇〇点を
 ご覧頂きま
 す。近年では、
 町田市立国際
 版画美術館で
 一九九〇年
 に、作家を招
 聘しての制
 作・講演が行
 なわれ、神奈
 川県立近代美
 術館では二〇
 一一(平成二
 十三)年に、
 同館所蔵品に
 よる二見彰一
 展が開催され
 ています。



《アンダンテ・カンタビレ》 1983 (昭和58)年 紙、アクアチント

初めての機会でしょう。
 何かと騒々しく、埃っぽい事件の
 多い今日この頃、二見作品の静かな

Information

○二見彰一 自らの作品を語る

日時：2013年11月23日(土・祝)
 14:00~14:40 (予定)

会場：当館展示室

作家本人が、展示会場で自作について語ります。

(申込不要、展示会入場券が必要です)

○二見彰一展 音楽と美術と

日時：2014年1月12日(日)、13日(月・祝)
 14:00~14:30 (予定)

会場：当館展示室

演奏：斎藤樹里氏 (ハープ)

作品にちなんだ音楽の演奏を聴きながら、作品をご覧
 頂きます。

(申込不要、展示会入場券が必要です)

○ちょこっと体験講座「銅版画」

日時：2014年1月8日(水)~1月12日(日)
 各日10:00~12:00、13:00~15:00

会場：当館エントランスホール

15分の創作体験！銅版画の簡単な刷りが体験出来ま
 す。(申込不要、無料。一部の体験は材料費100円を
 実費で頂きます。)

○二見彰一展関連 銅版画講座 「アクアチント講座 構成の愉しみ」

日時：2014年1月13日(月・祝)

会場：当館実技室

講師：柳本一英氏 (版画家)

対象：中学生以上の個人

音楽をテーマにした、銅版画の講座です。銅版画技法
 の一種である、アクアチントに挑戦します。個別チラ
 シ、もしくは当館ウェブサイトをご覧下さい。一カ月
 前を目処に、募集を開始します。(要申込、1,500円
 程度の材料費を実費で頂きます。)

各イベントの詳細は、当館ウェブサイトをご覧ください。

大岡雲峰《日金山富嶽眺望図》について — 関東南画の一系譜 —

主任学芸員 福士 雄也

南嶺を丸のみにしたいきはひは雲の上
迄其名きこゆる
大極上々吉寿千載

右は、『現存雷名 江戸文人寿命附』（嘉永二年「一八四九」刊）に載る、大岡雲峰（二七六五〜一八四八）への評である。著者は、上野七日市藩医にして戯作者の畑銀鶏（一七九〇〜一八七〇）。同書の凡例によれば、評言は和歌でも狂歌でもなく「作者のほめことば」であって、仮に三十一字の体裁をとっているにすぎないという。つづく「大極上々」は、その専門（画人、書家、儒者など）同士のランク分け。「千載」という寿命は、銀鶏が夢の中で武内宿禰に見せてもらった「草稿」にあったものという設定になっている。

雲峰は、今でこそ一般に名が通っているとは言い難い存在だが、当時は谷文晁（一七六三〜一八四〇）と並んで最高ランクの格付けが与えられていたわけである（註1）。雲峰は柳川藩立花家の家臣の子として生まれ、画は鈴木芙蓉（一七五二〜一八一六）に学んだ。「南嶺」とは、もちろん清人画家・沈南蘋（一六八二〜？）のこと。「雲の上迄」云々は、一応「雲峰」にかけてあるようだ。ついでに記せば、文晁への評には「海内に其名と、ろく写山楼三国一の富士の名人」とある。あまりといえばまっとうに過ぎる評なので、個人的には本編よりも序文や凡例の方がよほど面白く読める。



図1 大岡雲峰《日金山富嶽眺望図》 葛布地着色 天保10年（1839） 静岡県立美術館

にある標高七七四メートルの山で、ここから相模・武蔵・安房・上総・下総・駿河・遠江・信濃・甲斐・伊豆の十か国が見えることから、十国峠ともいう。太宰治も、『富嶽百景』のなかで十国峠から見える富士を絶賛している。

図は、日金山から北を向いて富士山を望む景観を描いており、相模湾と駿河湾を一望のもとに収めつつ、箱根連山の向こうにひととき高く富士山がそびえる。実際にはパノラマ状に広がるこのような景観を一目で見ることができないのだが、地形を把握したうえで景観を再構成し、こうした絵作りを行っているのである。

賛は次のように読んだが、問題も多いことと思う。解釈も含め、識者の教示を仰ぐ次第である。

日金絶頂暮秋天 日金絶頂、暮秋の天。
五寫十州指顧前 五寫十州、指顧の前。
嶽雪俯窺清渚底 嶽雪俯窺す、清渚の底。

さて、ここに
取り上げる『日金山富嶽眺望図』（静岡県立美術館、図1）は、文晁ではなく雲峰による富士山図である。日金山とは、伊豆半島の付け根にある標高七七四メートルの山で、ここから相模・武蔵・安房・上総・下総・駿河・遠江・信濃・甲斐・伊豆の十か国が見えることから、十国峠ともいう。太宰治も、『富嶽百景』のなかで十国峠から見える富士を絶賛している。

遙帆晴掛乱山巔 遙帆、晴掛かりて山巔を乱す。
屐痕雲起埋鳶背 屐痕、雲起りて鳶背を埋め、
杖處泉驚及馬肩 杖つく處、泉驚して馬肩に及ぶ。
長嘯韻応通帝座 長嘯、韻応に帝座に通ずべし。
整巾且試掛群仙 巾を整へて且に群仙を掛むるを試みんとす。

右栗山先生詩
己亥夏六月
八十二翁龍河讓書

山巔は山頂、屐痕ははきものの跡、鳶背・馬肩はそれぞれ、鳶肩・馬背を踏まえた造語か。長嘯は、声を長く引いて詩や歌を吟ずること。帝座は、中国で天帝の居と定められた星座。中はずきんのこと、ここでは富士山頂の雪を言っている。雪を頂いた富士が海の底までも俯瞰するようにそびえ立つ様子や、海に映った富士の上を船が通り、山頂がゆらめくさまを述べる。最後は、富士山を天帝（造物主）になぞらえている。「右栗山先生詩」とあるように、この詩は『栗山堂詩集 卷二』（国立国会図書館、刊行年不詳）に一部字句を異にして載る。

賛者については、平成十五年度に当館に収蔵されて以降これまで不明とされてきたが、「八十二翁龍河讓書」という署名や、関防印に見える「桐陰」の印文から、天保七年（一八三六）版『當時現在 廣益諸家人名録』に儒教・道教学者として載る大藏謙斎（一七五七〜一八四四）であることが判明する。謙斎は、名は讓、字は仲謙で、龍河、桐陰などと号した。署名下の二つの

印はほとんど判読不能だが、下の印はかろうじて「仲謙」と読めそうだ。

謙斎は信濃（長野）出身で、飯田本町の豪商藤屋善八の次男。医を桜木闇斎（一七二五～一八〇四）、学を柴野栗山（一七三六～一八〇七）に学び、詩歌も得意とした。江戸牛込に居住して遠山氏の老職となり、のち平賀氏に仕える。平賀貞愛の長崎奉行赴任に従ったが、病により辞職。諸国遍歴して天保十年に郷里に帰り、飯田藩、山吹藩に出入りして皇道を遊説したという。玉手棠洲《天保山図》（大阪くらしの今昔館）への着賛も知られる。本図の賛にある「己亥」が天保十年（一八三九）であることは、当然ながら賛者が判明してはじめて確定し得ることである。



図2 中山高陽《八州勝地図》紙本墨画 安永6年（1777）個人蔵

図に戻ろう。日金山からこのように富士山を望む図は、安永六年（一七七七）の中山高陽《八州勝地図》（個人蔵、図2）を早期の例として、これ以降新たな富士山絵画の定番として描かれていくことが、宋紫石や広瀬台山らの作例からもうかがえる。河村岷雪『百富士』（明和四年「一七六七」刊）に載る図はこういうパノラミックな景観ではないが、高陽作

品をさかのぼる時期にすでに富士山ビューポイントとして認識されていたらしい。むしろ、『百富士』がその素地を準備したと考えることもできるだろう。

本作は、まずはこうした流れの中に位置付けられるものだが、より直接には、恩賜京都博物館編『文晁遺芳』（昭和十四年「一九三九」刊）所載の谷文晁《日金絶頂真景図》（所在不明、図3）をもとに制作されたと見て間違いない。図様はほとんど同一で、雲峰画に画中人物が描き込まれる点と、画絹ではなく葛布が用いられている点が目立った違いとして指摘できる程度である。大蔵永常『製葛録』（天保十一年刊）によれば、葛布は掛川を主な生産地としていたという。筆触を抑制した描法や中間色を主体とした穏やかな色感には、寛政期の代表作である谷文晁《連山春色図》（静岡県立美術館）に近しいものがあり、文晁作品との関連は気になっていたのだが、ずばり文晁画に倣うものだったのである。この文晁画には、柴野栗山による件の詩が栗山自身の筆によって書かれており、「壬戌」の年記から享和二年（一八〇二）の着賛であることも分かる。両作品の親子のような関係からして、少なくとも雲峰作品の画



図3 谷文晁《日金絶頂真景図》（所在不明）

の筆によって書かれており、「壬戌」の年記から享和二年（一八〇二）の着賛であることも分かる。両作品の親子のような関係からして、少なくとも雲峰作品の画

賛はほぼ同時期であったと考えてよからう。雲峰の署名と謙斎の賛に用いられている墨は、やや濃い目で粘り気のある質感が共通しており、同じタイミングでの制作であった可能性もある。画の制作も天保十年として問題ないと考えられる。ところで、文晁画に付された栗山の賛には、七律の前に次のような興味深い一文が置かれている。

何此図似池無名筆意

文晁之技不可測也云日金

絶頂真景

「何ぞこの図池無名の筆意に似んや。文晁の技測るべからざるなり。これ日金絶頂真景」。この図がどうして池大雅（一七二三～七六）の筆意に似ていることがあるだろうか。文晁の画技は測り知れないものであるのだ、という。たしかに、富士山フリークともいべき大雅が数多く描いた富士山図とはとても似つかないものではあるが、肝心なことは、こうした作品を制作するにあたって、文晁や栗山がいまだに大雅を意識せざるを得ないほど、大雅の存在感が大きなものであったという事実である。すでに没後三十年になろうというのに、富士山といえは大雅という意識が広く浸透していたようだ。

雲峰については、残念ながら往時の評判は見るともなく、画業の全容をつかむこともままならない状況にある。近年見出された画帖中の一図（註2）などを見て、こ

の時期の注目すべき画家の一人であることとを確信するが、本作はその雲峰の大作として貴重な作品であることを、まずは強調しておきたい。文晁作品の写しであることは、本作の重要性をむしろ高めるものである。中山高陽から続く主題の継承は、まさに関東南画の系譜を示すものであり、そこに大雅の影がちらつくあたりも非常に興味深い。富士山ビューポイントの増加のなかで、日金山がその地位を確たるものとしていった様子が見える点でも注目すべきである。京坂の版元から出版された『百富士』も、ここに関わってくるかもしれない。そういえば、文晁が挿絵を手掛けた川村寿庵《名山図譜》（文化二年「一八〇五」刊）に見える富士山も、日金山から望む富士山に近い。

取りとめのない雑文となったが、これまであまり注目されることのなかった本作が、江戸後期の実景図を考える上でも示唆に富む点を指摘して、未整理の覚書とした。

註

1. 大岡雲峰の伝記については、鈴木泉「埋もれた江戸の画人たち—大岡雲峰と坂本浩雪—」（『江戸の博物館』世田谷の本草画家斎田雲岱の「世界」展図録 世田谷区立郷土資料館 一九九六年）に詳しい。『現存雷名 江戸文人寿命附』の記載も、同論文によって知った。

2. 『江戸絵画の楽園』展図録 静岡県立美術館 二〇一二年 九六頁

「トツカン」というしごと

学芸員 浦澤倫太郎

この四月より静岡でお世話になっていきます。生活はようやく落ち着いてきたものの、仕事ではまだまだ勉強が足りないとの反省の毎日です。

今回は新米学芸員からみた学芸員の仕事の一端についてお伝えしたいと思います。

そもそも学芸員の仕事とは何でしょうか。展示？研究？解説？私も以前は、そうした展示会関連の業務を思い浮かべていました。しかし、実際美術館で働いてみると、業務の多様さは予想外でした。

その中で、自分に任された業務の一つが「特別観覧」（通称トツカン）担当です。「観覧」とはいうものの、現在ではもっぱら研究目的や公共性が高い、あるいは当館の広報に資すると判断された特別な場合に限って、収蔵品の画像の貸出が主な業務です。内容は電話・Eメールのやり取り、書類の起案などがメインですが、商品開発する会社、テレビや新聞といったマスコミなど、各種業界の様子を窺うことができ、また収蔵品に詳しくなれることも、新入りとしてはありがたい限りです。



趣味は旅です。(2013年春 ウニ塩湖(ポリビア)にて)

今年の世界文化遺産に登録された富士山を題材とした絵画を中心に、例年になく多数のご申請をいただいております。特に多いのが静岡県庁のポスターなどでもすっかりおなじみの横山大観《群青富士》で、紛う方なき当館のスター選手です。ほかにも一時は登録が危ぶまれた三保松原を描く《富士三保松原図屏風》や木村武山《羽衣》などにも注目は集まっているようです。ちなみにこれらの作品は「富士山の絵画」展（平成二十五年九月七日〜十月二十日）でも展示されていますのでぜひともご覧ください。

ともあれ、トツカンが増えれば、当館コレクションが皆様の目に触れる機会も増えることとなります。これを機にその魅力を広く知って頂ければ幸いです。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737
ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

無料託児サービス
毎週日曜日および祝日10:30～15:30
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。
※詳細は美術館学芸課までお問い合わせください。
(Tel: 054-263-5857)



風景とロダンの 静岡県立美術館

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課 / Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課 / Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



表紙の作品
黒田清輝 (1866-1924 / 慶応2-大正13)
《富士之図》(6点組)より 板、油彩
25.0×33.0cm 明治31年(1898)

ムセイオン静岡・富士山世界文化遺産応援シンフォニー マウント・カルチャー∞ 名画・山水8つの視点

富士山の世界文化遺産登録を視野にムセイオン静岡が連続講座を開講中です。

10月26日(土)15:00～17:00

会場 舞台芸術公園「楢円堂」
三谷 理華 静岡県立美術館上席学芸員
セザンヌとサント・ヴィクトワール-南フランスの富士山?

11月23日(土)15:00～17:00

会場 静岡県立大学小講堂
福土 雄也 静岡県立美術館主任学芸員
富士山のトポスとその変遷-富士山をどこから描くか

12月21日(土)15:00～17:00

会場 静岡県立大学小講堂
立田 洋司 静岡県立大学特任教授
山と自然と音楽・美術

詳細については美術館・総務課までお問い合わせください。

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。